脚　本　名	ハルキゲニアのとげ
作　者　名	向井　瞬
上演学校名	県立秦野高等学校
あらすじ	ハルキゲニア――約 5 億年前のカンブリア紀の海に生息した古生物。7 対の細長い脚と棘を持つ。発見された当初は上下逆に復元されていた。名前の由来は「幻覚から生まれたもの」。
作者連絡先	dreamfactory132@gmail.com（向井瞬あて）
備　考	第 63 回大会

ハルキゲニアのとげ

作・向井　瞬

登場人物

葉山（はやま） **夏実**（なつみ）　（高校二年　女）

苗木（なえぎ） **深冬**（みふゆ）　（高校二年　女）

片瀬（かたせ） **智遥**（ちはる）　（高校二年　女）

葉山（はやま） **晃斗**（あきと）　（高校一年　男）

月島（つきしま） **綾**（あや）　（高校二年　女）

渋谷（しぶや） **茉奈**（まな）　（高校二年　女）

牧野（まきの） **将一**（しょういち）　（飲食店の店長　男）

葉山（はやま） **志乃**（しの）　（夏実の母　女）

1

深冬がバイトをしている飲食店の店内。

深冬、将一がいる。

深冬　ありがとうございましたーっ！

将一　（深冬の後にすぐ重ねて）ありがとうございましたー。

深冬　またお越しくださーい。

将一　深冬ちゃん。そろそろ閉めようか。

深冬　あ、じゃあ暖簾（のれん）下ろしちゃいますね。

深冬、表に出て暖簾を下ろして戻ってくる。

将一　いやあ、やっぱり深冬ちゃんの影響かなあ。

深冬　何がですか？

将一　ここんところ目に見えて客足伸びてるんだよ。バイト一人入れただけでこんなに変わるなんて。深冬ちゃん目当てで来てるんだな。

深冬　私じゃなくてもバイト入れたらこうなったと思いますよ。

将一　そんなことないでしょ。

深冬　そんなことあります。店長固いんですよ。料理おいしいのに入りづらい雰囲気があるんですよね、きっと。もっと元気よく接客すればいいのに。

将一　元気よく……苦手だな。

深冬　だから元気のいい人が必要だったんです。

将一　深冬ちゃんは適任だったわけだ。

深冬　明るさだけは自信あります。

将一　名前は深冬なのにね。深い冬だなんてイメージが正反対だ。

深冬　やっぱり思いますよね。いっそキャッチコピーにしようかと思ってるんですよ。「冬だけど明るい。苗木深冬です！」

将一　芸人にでもなるの？

深冬　あ、ギャグなら自信あります。（お辞儀しながら）「アノマロウカリーッス！」

将一　……何それ。

深冬　節を付けて「アノマロカリス」って言うとありがとうございますに聞こえるんです。

将一　いや全然聞こえないけど。

深冬　いやいや聞こえますって。アノマロウカリーッス！

将一　無理があるよ。

深冬　えー。

将一　そもそもアノマロカリスって何？

深冬　えっ、知らないんですか？　昔いた生き物ですよ。古生代カンブリア紀の。

将一　知らないよ。誰に通じるのそれ。

深冬　お父さんには大ウケだったんですけどね。

将一　博識なお父さんだね。

深冬　私が芸人になったらこのギャグを流行らせます。

将一　その前向きな姿勢は素直に尊敬するよ。

深冬　アノマロウカリーッス！

将一　やっぱり冬っていうより夏だな。

深冬　店長、紫外線が一年で一番強いのは何月だか知ってますか？

将一　え……実は十二月とかってこと？

深冬　ぶぶーっ。地域によって変わりますけどだいたい七月か八月ですね。

将一　夏じゃないか。イメージ通りだよ。

深冬　なんか「実は冬の方が」みたいのないかなーって思って結構調べたんですよね。でもいくら調べてもイメージ通りすぎて逆にびっくりしました。

将一　なんだ逆にって。

深冬　世の中って意外と普通ですよね。

将一　それを言ったら深冬ちゃん自身が普通じゃないと思うけど。

深冬　私ですか？　見ての通りフツーの国のフツー姫ですけど。

将一　姫？

深冬　私のどこが普通じゃないっていうんですか。

将一　……実を言うと深冬ちゃんを雇うかどうか結構悩んだんだよね。

深冬　ええっ、なんでですか。

将一　だってそうだろ？　店仕舞いをしてるところに突然現れてバイトさせてくださいって。夜中に一人。わかるのは名前だけで住所も不明。身分を証明するものもない。

深冬　よくそんな人雇いましたね。怪しすぎますよ。

将一　君のことだからね？

深冬　そうでした。

将一　ちゃんと働いてくれてたから特に深くは突っ込んでなかったけど。

深冬　……正直よく覚えてないんですよね。なんであんなところにいたのか。なんで何も持ってなかったのか。

将一　ええ……病院とか行った方がいいんじゃ……。

深冬　保険証もないので。

将一　そういう問題じゃなくてね？

深冬　店長も物好きですよね。結局怪しい人物を雇っちゃって。私は助かりましたけど。

将一　物好きというか……あのとき、店を畳むことを考えててね。

深冬　えっ？

将一　夢だった店を開いたはいいけど経営的には赤字も赤字。料理は好きだけどそれだけで仕事になるはずもなし……そもそも店を開いたこと自体が間違いだったんじゃないかって。

深冬　ネガティブだなー。

将一　どうせ潰れるならその前に謎のバイトを店に入れるのも一興かと思ったんだ。

深冬　急に大胆！　……きっと辛すぎて頭のねじが外れちゃったんですね。

将一　ちょいちょい失礼だよね君は。

深冬　フレンドリーなところが魅力だと思ってます。

将一　ものは言いようだな。……まあそのおかげで店が盛り返したところはあると思うしいんだけどね。

深冬　店長のそういうチョロ、優しいところも魅力だと思いますよ。

将一　今チョロいって言おうとしたよね？

深冬　違います違います！　えっと、ちょ、猪八戒（ちょはっかい）って言おうとしたんです。店長の猪八戒も魅力的です。

将一　意味がわからないしなんならそれも悪口に聞こえるからね？

深冬　猪八戒といえば今日のまかないはなんですか？

将一　（ため息）……ネギチャーシュー丼。今出すよ。

深冬　絶対おいしいやつじゃないですかー。

将一　僕が猪八戒なら共食いだな。

深冬　ご飯大盛りでお願いしますね。

将一　わかってるよ。遅くにそんなに食べて太っても知らないからね。

深冬　私食べるの好きなんで。まかない目当てで飲食店のバイトを狙ったまであります。

将一　なるほど。

深冬　食べることほど生きてることを感じられる行為はありませんから。太ったとしてもその代償として潔く受け入れます。

将一　やれやれ。じゃあたんと召し上がれ。

深冬　はーい！

深冬、将一出ていく。

2

学校の教室。夏実が机に突っ伏して寝ている。
綾、茉奈が夏実に近づいてくる。

綾　教室で豪快に寝すぎじゃない？

茉奈　話す相手いないから寝たふりしてるんじゃないの？

綾　じゃあ私たちが話し相手になってあげようか。

茉奈　へー、綾優しいじゃん。そんなことするキャラだっけ。

綾　ちょっと面白いこと聞いたからさ。

茉奈　面白いこと？

綾　ちょっとね。（夏実に）夏実ちゃーん。

夏実、ゆっくり起き上がる。
至近距離に二人がいるのに気づき、身を固くする。

夏実　……えっと、何か？

綾　夏実ちゃんとおしゃべりしようと思ってさ。

茉奈　休み時間に一人でいるなんて寂しいじゃん。

夏実　……ごめんなさい。眠くて。

綾　駄目だよー。夜ちゃんと寝ないと。

夏実　寝てるつもりなんだけど……。

綾　私なんか昨日十時間寝たからね。

茉奈　マジで？　綾ロングスリーパーじゃん。

綾　寝不足は美容に悪いって言うし。

茉奈　それで肌綺麗なんだ。茉奈もちゃんと寝よー。

綾　夏実ちゃんももっと色々気を遣った方がいいと思うよ。

夏実　え……うん。

茉奈　なんかテンションひくー。

綾　まあまあ。いきなり来たらびっくりするよねえ？

夏実　あの、何か用があるんじゃ……。

茉奈　おしゃべりしに来たって言ったじゃん。

夏実　はあ……。

綾　私らクラスのみんなと仲良くなりたいと思っててさ。今まで話したことない人とも絡んでいこうと思って。

夏実　……そうなんだ。

綾　つーわけで、仲良くしようよ。握手握手。

綾、手を差し出す。夏実、身を固くする。

綾、夏実の方に手を突き出す。夏実、大袈裟に身を引く。

夏実　……あ、ごめん……。

綾　……噂、本当なんだ。

夏実　え？

綾　夏実ちゃん、人に触れないんだって？

夏実　……。

茉奈　え、何それ。どういうこと？

綾　私は人づてで聞いただけだけどね。「葉山夏実は他人に触ることができない」。

茉奈　潔癖症ってやつ？

綾　なんかちっちゃい頃のトラウマがあるとか聞いたけど。

茉奈　えー、かわいそ。

夏実　……。

綾　本当に触れないの？

夏実　……うん。

茉奈　マジで？　そんなことってあるんだ。

綾　えー、でも気づかないうちに触ってるとかあるんじゃないの？

夏実　……心因性だから意識してなければ大丈夫ってお医者さんが……。

茉奈　へー。

晃斗、入ってきて夏実に声をかけようとするが、雰囲気を察し様子を見る。

綾　ねえ、触ったらどうなるの？

夏実　え？

茉奈　気になる気になる。

綾　触ってみようか。

夏実　やめて……。

晃斗　姉ちゃん。

晃斗、夏実に近づく。

綾、晃斗を一瞥して手を下げる。

夏実　晃斗……。

晃斗　あ、ごめん。なんか話し中だった？

夏実　いや……。

綾　じゃあ夏実ちゃん。また話そうね。

茉奈　今度どっか遊びに行こうよ。

夏実　あ……。

綾、茉奈、出ていく。

間。

晃斗、夏実に大きな弁当を差し出す。

晃斗　……弁当。テーブルの上に置きっぱなしだったよ。

夏実　あ、ごめん……ありがと。

晃斗　こんなデカい弁当忘れるなよ。

夏実　うるさい。

晃斗　……俺から話そうか？

夏実　え？

晃斗　姉ちゃん、なんか今の人たちに絡まれてたでしょ。

夏実　……。

晃斗　姉ちゃんが言いにくいなら俺が言って

夏実　やめて。

晃斗　え……。

夏実　別にこういうの初めてじゃないから。自分で対処できる。

晃斗　でも……。

夏実　晃斗には関係ない。私の問題だから。

晃斗　……。

夏実　とにかく、余計なことしないで。

夏実、出ていく。

晃斗　……。

3

飲食店の店内。

晃斗が店に入り、深冬が近づいてくる。将一が奥で料理をしている。

深冬　いらっしゃいませー。こちらのお席にどうぞー。

晃斗、促されるままに座る。

深冬　ご注文決まりましたらお呼びください。

晃斗　……ほっけ焼き定食。

深冬　ほっけ定一丁ーっ。……君、たまに来るけど高校生くらいだよね？　ここお酒も出す店だし、こんな時間に来るのは感心しないなあ。

晃斗　……晩飯食うだけなんで。

深冬　おうちで食べないの？　親御さんは？

晃斗　片親で遅くまで仕事してて……晩飯代もらってるんで。

深冬　あ、兄弟とかは？

晃斗　……姉が一人。……けどこの時間はだいたい家にいないんで。

深冬　ふーん。君も色々大変なんだね。でもこんな大人な店に入らなくても年相応なところあると思うけどな。お姉さん（一人称）心配だよー。

晃斗　ここ、家から近いし料理美味いんで。

深冬　あ、それはわかる。おいしいよね。んじゃま、ゆっくりしていって。（将一の方へ歩きながら）店長ーっ。やっぱり料理おいしいってー。

晃斗　……人のこと言えた歳かよ。一つしか違わないだろ。

晃斗、スマホをいじるなどして料理が来るのを待つ。

深冬　やっぱりわかる人にはわかるんですねー。

将一　そんなマニアックな料理を出してるつもりはないんだけどな。

深冬　若い人の方が舌が敏感なのかも。注文の傾向見ても若いお客さんの方が料理たくさん

頼んでくれてる気がしますし。

将一　それは単に若い方がたくさん食べられるって話なんじゃ……。

深冬　若い人向けの映えるメニュー作ったらそこから火が付くかもしれないですね。

将一　映えるメニュー？

深冬　見ためにインパクトがある料理ですよ。お酒も頼んでくれそうな大学生辺りをターゲットにして、上手くいけばお客さん一気に増えると思いますよ！

将一　なるほど……ちょっと考えてみようかな。

深冬　期待してます。

将一　……それより深冬ちゃん。彼、大丈夫？

深冬　彼？

将一　（晃斗を見て）あの男の子。

深冬　ああ。

将一　確か深冬ちゃんがバイト始めてから来るようになったと思うんだよね。もしかしてストーカーとかなんじゃ……。

深冬　考えすぎですよ。私がバイト始める前はこの店の知名度低すぎたから単に知らなかっただけじゃないですか？

将一　……。

深冬　あ、嘘です嘘です。知名度マックスでした。ミシュランガイドに載ってますし。

将一　載ってないよ。悲しくなる嘘つかないでよ。

深冬　あの子私に好意を持ってるようには見えないですけどね。全然目合わないし。合ったと思ったらにらまれるし。

将一　それは気がある証拠だよ！　男は恥ずかしくて本気の子とは目合わせられないもんなんだよ。ちらちら見て目に焼き付けようとするからにらんでるように見えちゃうんだよ。

深冬　店長もそうなんですか？

将一　え？　まあ……ほら、こうして見てるとにらんでるように見えるでしょ？

深冬　こわっ。

将一　奥さんは高校のときクラスメイトだったからさあ。こう……授業中にね。チラッ、チラッ、って。かわいいなあー、ノリちゃん。あ、眠そうにしてる。ああ、ノリちゃんの椅子になりたい……。

深冬　ほっけ焦がさないでくださいね。

将一　とにかく、あんまり関わらない方がいいよ。

深冬　んー、でもなんか気になるんですよね。ほっとけないというか。

将一　そんな気のあるそぶりしたら勘違いしちゃうでしょ。ほっとけばいいんだよ。

深冬　ほっけとほっとけって似てますね。

将一　……。

深冬　……。

将一　……もっと警戒してよ。それでなくても深冬ちゃん遅くまで働いてて帰り道心配なんだから。

深冬　別に平気だと思いますけど。

将一　あ、じゃあこうしよう。深冬ちゃんがわざと隙を作って突然振り向くんだ。きっと目が合うから。

深冬　はあ……。

将一　はい、ほっけ定あがり。

深冬、料理を持って晃斗のところへ行く。

深冬　ほっけ焼き定食お待たせしましたー。

深冬、変な歩き方で奥へ戻り、途中で突然勢いよく振り返る。

晃斗、食べようとしていた手を止めて何事かと深冬の方を見る。

深冬、首をかしげながら奥へ行く。

晃斗　……なんなんだよ。

晃斗、料理を口に運ぶ。

晃斗　……苦っ。

4

学校の教室。夏実が机に突っ伏して寝ている。

智遥が近づいてくる。

智遥　あの……葉山さん。

夏実　……。

智遥　葉山さん。

夏実、ゆっくり起き上がった後智遥を見て慌てる。

智遥　あ、ごめんね。起こしちゃって。

夏実　な、何？

智遥　文化祭のクラスTシャツのサイズ集計してて、葉山さんまだ聞けてなかったから……。

夏実　あ、ごめん！

智遥　あ、いいのいいの。まだ確認できてない人他にもいるし。で、サイズどれにする？

夏実　えっと……Mサイズで。

智遥　了解。

智遥、スマホに入力する。

夏実、智遥のスマホに付いているストラップに気づく。

夏実　……あ、アノマロカリス。

智遥　え？

夏実　あ、ううん。なんでもない。

智遥　……これ、知ってるの？

夏実　えっと……うん。それ、ガチャガチャの景品だよね。

智遥　そう。古生代カンブリア紀いきものシリーズ。本当はオパビニアってやつが欲しかったんだけど何回やっても出なくてさー。まあアノマロカリスもかわいいからいいんだけど。

夏実　あ、オパビニア……私持ってる。

智遥　ほんとに⁉　……え、もしかして葉山さんも古生物に興味あったりする？

夏実　……うん。結構好き。

智遥　えーすごい！　何？　何が好き？

夏実　ハルキゲニアとか……。

智遥　いいよねーハルキゲニア。背中のとげとげがかわいいし、とげと同じ数だけ足があるっていうのも面白いし。

夏実　うん。見た目もそうだしエピソードも好きで。

智遥　ああ、復元図が二転三転してるのとかね。

夏実　そうなの！　最初考えられてたのとは上下も逆さまだし前後も逆さまで、化石の復元から何十年も経ってそれまでの常識が文字通りひっくり返ったっていう……。

智遥　……。

夏実　……あ、ごめん……。

智遥　あ、ううん。葉山さんがそんな風に話すの初めて見たからちょっと驚いちゃって。古生物の話題で盛り上がれる人なんて今までいなかったから嬉しい。

夏実　……そっか。

智遥　うん。

夏実　……か、片瀬さんはオパビニアのどこが好きなの？

智遥　んー、好きポイントは色々あるんだけど、一番は前部付属肢かな。

夏実　わかるー！　やっぱり前部付属肢だよね！

智遥　オパビニアって言ったら特徴的な長い口吻だけど、吻の先にちょこんと前部付属肢があるのがニクいんだよね。

夏実　そこ口じゃなくて脚なんかいって。

智遥　あるあるー。

夏実　あと、目が五個あるのもずるいと思う。

智遥　それ！　ずるいよねー。なんで私の目は二個しかないんだろ。あ、目っていえばあれも五個のうちどこまで中眼でどれが側眼なのか解釈が分かれてるって話もあって。

夏実　へえ、そうなんだ。ごめん、オパビニアはあんまり詳しくなくて。

智遥　いや十分詳しいよ。ここまで話についてきた人いないよ。

夏実　家にそういう本があったからかな。ちっちゃい頃から好きで、ぬいぐるみとかフィギュアとか見かけるとつい買っちゃっうし。

智遥　あ、だからこのガチャガチャやったんだ。ハルキゲニアもいたもんね。

夏実　でもハルキゲニアは結局当たらなくて……。

智遥　そうなの？　あ、じゃあ私の持ってるのあげるよ。今度持ってくる。

夏実　え、そんな、悪いよ。

智遥　いいのいいの。ハルキゲニア二匹持ってるし。

夏実　……あ、じゃあ私もオパビニア持ってくる。片瀬さん持ってないんだよね。

智遥　いいの？

夏実　うん。大丈夫。

智遥　じゃあ交換ってことで。古生物仲間の友情の証に。

夏実　……うん！

智遥　じゃ、私行くね。睡眠の邪魔してごめん。

夏実　ううん。こっちこそごめん。

智遥　またね。

夏実　また……。

智遥、出ていく。

夏実、ふわふわした足取りで家に帰る。

夏実　ただいま。

志乃が出てくる。

志乃　おかえり。早かったね。

夏実　……いたんだ。

志乃　立て込んでた仕事がやっと片付いてね。今日は久々の休み。

夏実　そう。

志乃　いいことでもあったの？

夏実　え？

志乃　なんかニコニコしてたから。

夏実　別に……。

志乃　そう。

夏実　……。

志乃　最近学校はどう？

夏実　別に……普通。

志乃　……そう。

間。

志乃　……何か我慢してることとかあるなら言ってね。

夏実　……何、急に。

志乃　離婚してからこっち、ずっと仕事仕事で落ち着いて話す機会もなかったから。別に夏実たちをないがしろにしてたわけじゃないんだけど、当人たちからすれば色々思うところもあるのかなって。

夏実　……。

志乃　ほら、夏実昔はもっと元気だったじゃない？　大人になったらお笑い芸人になるんだーとか言って。

夏実　やめてよ。

志乃　何か嫌なことがあったりしたんじゃないの？

夏実　別に。そもそも今さらでしょ。

志乃　……そう。晃斗はマイペースだからあんまり心配してないんだけど、夏実はため込みそうだから……あまり無理しないようにね。

夏実　……。

志乃　あと、最近ずいぶん遅くまで出かけてない？　この前帰ったときに靴なかった気がするんだけど。

夏実　子どもじゃないんだから。ほっといてよ。

志乃　夏実。

夏実　出かけてくる。

夏実、出ていく。

5

飲食店の店内。深冬、晃斗、将一がいる。

深冬は指に絆創膏を付けている。

暇なのか、食べている晃斗の横で話をしている。

深冬　少年よ、大志を抱け。

晃斗　……はあ。

深冬　あ、お子様にはわからないかあ。有名な言葉なんだけどね。

晃斗　いや知ってますよ。クラーク博士の言葉でしょ。

深冬　え、博士？　誰？

晃斗　誰の言葉かも知らないでよくドヤ顔できるな。

深冬　いや私が言いたいのは、もっと明るく生きようよってことなの。

晃斗　大志って明るいって意味じゃないですよ。

深冬　わかってるよ！　なんか希望持って生きようみたいなことでしょ？

晃斗　微妙に違うような……。

深冬　君いっつもぶすっとしてるじゃん。眉毛がこう、横になってるっていうか。

晃斗　生まれつきこういう顔なんで。

深冬　そんなことないと思うけどなあ。

晃斗　（深冬の指を見て）指、どうしたんですか。

深冬　あ、これ？　ちょっと包丁で切っちゃってさ。大したことないよ。

晃斗　……そうですか。

深冬　そうだ。何か悩みとかあるんじゃない？

晃斗　……まあ人並みには。

深冬　だよねだよね！　悩みがあると人間暗くなっちゃうからさ。ほら、お姉さんに話してごらん？

晃斗　……簡単には人に言えないから悩みなんですよ。

深冬　もったいぶっちゃって。あ、じゃあ何か一個頼み事を聞いてあげよう。

晃斗　頼み事？

深冬　自分は一人で生きてるなーって思うとしんどくなっちゃうじゃない？　誰かが自分のために何かしてくれるって考えると心が軽くなるんだよね。あー、自分は一人じゃなかったんだなあって。だから、私が君に何かしてあげられたら、ちょっと元気出るかなって。

晃斗　……。

深冬　あ、言っとくけど無理難題は突っ返すからね。ちょっとだけ人に寄りかかるのがいいんだよ。ちょっとだけ。

晃斗　……ほんと真逆だな。

深冬　真逆？

晃斗　いえなんでも。……それって何かの受け売りですか？

深冬　……昔弟がよく言ってくれたんだ。「何してほしい？」って。別に弟にはそんなつもりはなかったかもしれないけど、しんどかったとき結構救われた……と思う。だからかな。

晃斗　……弟、いるんですか？

深冬　……あれ？　いた気がしたんだけどな。弟じゃなかったかも……犬だったかな。

晃斗　犬は何してほしいなんて言わないでしょ。

深冬　まあいいじゃん。それで？　頼み事、何かある？

晃斗　……とりあえずさっき注文した抹茶アイス持ってきてほしいですね。

深冬　そういうんじゃないんだけどなあ。まあ了解。

深冬、奥へ行く。

将一　深冬ちゃん。バイト、もう少し早い時間から入れたりしないかな。

深冬　え？

将一　夕方頃来るお客さん増えててさ。深冬ちゃんもいてくれるとすごく助かるんだけど。

深冬　うーん、ちょっと厳しいですね。

将一　そっかあ。いつも昼間の時間って何してるの？　学校？

深冬　寝てます。

将一　は？

深冬　目が覚めるのが夕方なんですよね。いつもわりと直行でここに来てるので、これ以上早いのはちょっと無理かも……。

綾、茉奈が入ってくる。

深冬　あ、いらっしゃいませー！　空いてる席におかけくださーい！

深冬、晃斗にアイスを持っていく。

将一　……何時間寝てるの？

綾、茉奈、席に着く。

深冬、一度奥に戻ってから綾と茉奈のところへ行く。

綾　ここの手まり寿司が見た目いいらしくてさ。めっちゃ映えるんだって。

茉奈　へー。

綾　まだバズる前だから今写真上げたら結構イケてると思うんだよね。

茉奈　綾よくこんな店知ってんね。

綾　友達が穴場の店探すの好きでさあ。あ、お酒飲む？

茉奈　えー、いけるかな？

綾　個人経営っぽいし大丈夫でしょ。

茉奈　じゃ、せっかくだし飲もっか。

深冬　お待たせしましたー。ご注文お決まりですか？

茉奈　茉奈はカシオレにしよっかな。綾は？

綾　（深冬を見て）……あんた、なんでこんなところにいるの？

深冬　？　……私ですか？

茉奈　（深冬を見て）げっ。マジ？

深冬　……どこかでお会いしましたっけ。

綾　……シラ切るってわけ？　まあそっちだって都合悪いもんね。

深冬　はあ。

茉奈　いいの？

綾　いいよ。そんなつもりで来たわけじゃないし。お互い見なかったことにしようってこ

とでしょ。

茉奈　そっか。じゃあ茉奈はカシオレとー、

深冬　あの、失礼ですが年齢確認のできるものを見せていただいてもいいですか？

茉奈　は？

深冬　間違ってたらすみません。未成年の方にお酒は提供できないので……。

綾　あんたさあ、トラブル起こしたくないからとぼけてんじゃなかったの？

深冬　？　トラブルは起こしたくないですけどとぼけてはないです。

茉奈　なんなのこいつ。

綾　もしかして双子の兄弟がいるとか言うわけ？

深冬　いないですね。

綾　……はあ。もういいよ。茉奈、ソフトドリンク頼も。

茉奈　ええっ？

綾　いいから。

深冬　ご協力ありがとうございます。

綾　手まり寿司とガーデンサラダ。あとジンジャーエール。茉奈は？

茉奈　えー、じゃあ、茉奈もジンジャーエール。

深冬　（奥に）手まり寿司一丁ーっ！　（二人に）少々お待ちください。

深冬、奥へ行く。

晃斗、綾と茉奈の会話をさりげなく聞いている。

茉奈　綾、いいの？

綾　いいわけないでしょ。マジむかつく。

茉奈　だよね。なんなのあいつ。ほんとに別人？

綾　そうは見えないけど。

茉奈　とぼけてんだったら相当だよねー。

綾　……明日、本人にカマかけてみようか。

茉奈　え？

綾　他人のそら似だなんてとても思えない。キャラ作ってるんだったら絶対どっかでボロ出るでしょ。学校で暴いてやろうよ。

茉奈　いいねそれ。

綾　絶対許さないから。

晃斗　……。

6

学校の教室。夏実と智遥が話している。

智遥　古生代って言ってもざっくり三億年近くあるからさあ。古生代好きっていう言い方してニワカだと思われるのは嫌だよね。

夏実　そんなこと考えるの智遥くらいだよ。一般人はカンブリア紀とオルドビス紀の違いもわからないよ。

智遥　そっかあ。……さすがに古生代と中生代の違いはわかるよね？

夏実　えっ……あ、うん。たぶんね。

智遥　だよねえ。億単位で違うもんね。

夏実　でもそう考えるとスケールでかすぎだよね。人間の歴史なんてせいぜい数千年……アウストラロピテクスまでさかのぼったって四百万年しかないんだもん。私個人で見たら百年生きるか生きないかだし。三億年と比べたらほんとにちっぽけな存在だなって。

智遥　夏実。古生代のスケールの大きさはロマンだけど、それと比べて自分を卑下したりしない方がいいよ。他がどうであっても、私たちは私たちで精一杯生きてるんだから。

夏実　……智遥はすごいよね。ちゃんと自分を持ってて。

智遥　自分……そうなのかな。私自身の感覚としては結構ブレブレで、自分ってなんなんだろうってよく思うけど。

夏実　えー、智遥でもそんなこと思うんだ。

智遥　思うよー。でも、自信あるように見えるなら夏実のおかげかも。

夏実　え？

智遥　古生物好きを夏実に肯定してもらえたから。（オパビニアを出す）自分の好きなものを好きでいていいんだって。

夏実　私は別に……。（ハルキゲニアを出す）むしろ私の方が智遥に救われたよ。

智遥　そっか。だったら嬉しいな。

夏実　うん。

智遥　……あ、そうだ。課題出しに行かなきゃ。ちょっと行ってくるね。

夏実　うん。いってらっしゃい。

智遥、出ていく。

夏実、ハルキゲニアを見て嬉しそうにしている。

そこへ綾、茉奈が入ってくる。

綾　おはよ。

夏実　お、おはよう。

綾　昨日はどうも。

夏実　昨日……？

茉奈　やっぱりとぼけるんだ。

夏実　え？

綾　夏実ちゃん、昨日の夜は何してたの？

夏実　夜？　……特に何も……。

茉奈　どこいたの？

夏実　家に……。

綾　それ、証明できる？

夏実　証明？　それは……何か証拠とかあるわけじゃないけど……。

茉奈　だよねえ。

夏実　……ごめん。私何かした？

綾　別に？　夏実ちゃんが何もしてないと思うなら何もしてないんじゃない？

夏実　えっと……。

茉奈　（ハルキゲニアを見て）それ何？

夏実　え？　えーと……ハルキゲニア……。

茉奈　ハルキ？　何それ。

夏実　あ、いや、大したものじゃないから……。

茉奈　嘘だあ。さっきすっごい見てたじゃん。

夏実　いやほんとに。なんでもないの。

綾　（夏実の指を見て）指……。

夏実　え？

綾　そうだ。昨日も指に絆創膏してた。

茉奈　そうだっけ。

綾　そうだよ。それ、どうしたの？

夏実　……起きたらケガしてて……たぶん寝てる間にどこかぶつけたんだと思う。

茉奈　そんなことある？

綾　さすがに言い訳として苦しいでしょ。

夏実　いや、本当に覚えてなくて……。

綾　いい加減とぼけるのやめてくれない？　昨日の夜、駅前の店でバイトしてたでしょ。

夏実　バイト？　いや、してないしてない。バイトなんてしたことないし。

茉奈　めんどくさ。これ以上それ続ける必要ある？

夏実　ごめん。本当になんのことだか……。

綾　あんたのくだらない正義感のせいでこっちは気分台無しにされたの。素直に認めて謝ればまだかわいげがあるのに。

夏実　ごめん。何か気に障ったなら謝るから……。

綾、夏実のハルキゲニアを取り上げる。

夏実　あっ。

綾　何これ。キッモ。

夏実　ハルちゃん！

綾　え？　それこれの名前？　名前付けてんの？

茉奈　キモー。

夏実　返して……。

綾　いいよ。キモいし。

綾、ハルキゲニアをしっかり握って差し出す。

綾　どうぞ。

夏実　……。

綾　どうしたの？　取っていいよ。

茉奈　うわあ。綾やっさしー。

夏実　お願い。返してください。

綾　だから取っていいってば。

夏実　……。

夏実、手を出そうとするが出せない。

綾　いらないの？　じゃあもらっちゃうね。

夏実　人からもらった大事なものなの。お願い……。

茉奈　他の人にあげましたすみませんって言えば？

夏実　……。

綾　昨日のこと、誰かにチクったりしないでよね。

茉奈　そんなことしたらこれ、どうなっちゃうかわかんないね。

綾、茉奈、出ていく。

入れ違いに晃斗が来る。夏実、反対方向へ出ていく。

晃斗　……。

7

飲食店の店内。深冬がいるところに晃斗が入ってくる。

深冬　いらっしゃいませー！　……お、少年。ちょうど良かった。今お客さんいなくて暇で

さあ。話し相手になってよ。

晃斗　……。

深冬　……どうしたの？　なんかあった？

晃斗　……姉ちゃん。

深冬　私はあなたのお姉ちゃんじゃありません。

晃斗　……姉ちゃん。

深冬　だから

晃斗　頼み事があるんだ。

深冬　……頼み事？　ああ、この間の話？　それはいいけどその姉ちゃんって呼び方やめてもらえないかな。なんか……むずがゆい。

晃斗　……俺じゃきっと助けられない。最初は姉ちゃんが意地張ってるだけだって思ってたけど、たぶん違うんだ。きっと姉ちゃん自身が感じてるんだと思う。いい加減この問題と向き合わなきゃいけないって。

深冬　それは、君のお姉さんの話？

晃斗　そうだけど、それだけじゃない。

深冬　それなぞなぞ？　私あんまり頭良くないんだけどな。

晃斗　姉ちゃん。

深冬　だから、なんで私のこと姉ちゃんって呼ぶの。

晃斗　姉ちゃんは、俺の姉ちゃんだから。

深冬　……よくわかんないけどなんかいかがわしい意味？

晃斗　違う。

深冬　じゃあ生き別れの兄弟的なやつ？　実は私も君のお姉さんで、姉が二人でしたー、み

たいな。

晃斗　俺に姉ちゃんは一人しかいないよ。

深冬　んんん？

晃斗　……解離性同一性障害。

深冬　え？

晃斗　いわゆる二重人格。姉ちゃんは一人の人間の中に二人分の人格が同居してるんだ。……姉ちゃんに見えてる世界がどんなものなのか、俺には正直わからないけど、俺から見たら夏実も深冬も同じ人間で……俺の姉ちゃんだよ。

深冬　……。

晃斗　……直接のきっかけがなんだったのかはわからないけど……離婚して父さんがいなくなって、引っ越して環境が変わって……いつも明るかった姉ちゃんがだんだん笑わなくなった。でもある日急に……本当に急に、昔の姉ちゃんみたいになったんだ。

深冬　それが、私？

晃斗　そう。母さんは姉ちゃんが元気になったって喜んでたけど、次の日にはまた姉ちゃんは塞ぎ込んでた。そういうことが何回かあって、母さんが姉ちゃんを病院に連れてったんだ。そこで……。

深冬　カニ入りドーナツコロッケ。

晃斗　解離性同一性障害。

深冬　あ、それそれ。

晃斗　……俺は母さんから断片的に聞いただけだけど。症状とか、詳しいことはその後自分で調べた。母さんは正直、信じてないみたいだったし。

深冬　そっか。

晃斗　人格が入れ替わるのは不定期で何ヶ月も変わらないこともあったけど、最近は毎日昼と夜で交代するみたいになってる。いつの間にかバイトまで始めてたのには驚いたけど。

深冬　私の様子を見にこのお店来てたの？

晃斗　それは……その、最初は気になって。でも最近は単純に美味いから食べに来てたっていうか……家も誰もいないし。

深冬　……。

晃斗　……俺の話、信じられる？

深冬　うーん。正直な話、うさんくささ爆発だよね。二重人格とかドラマの話かって感じだし。

晃斗　……。

深冬　……でも、不思議となるほどなって思ってる自分がいるんだよなあ。昼間の記憶がな

いこととか、たっぷり寝たはずなのにいつも眠いこととか。

晃斗　むしろそんな状態でよく疑問持たずに生きられたな。

深冬　無意識に深く考えないようにしてるのかもね。この状態を保てるように。

晃斗　……。

深冬　それで？　私にどうしてほしいの？

晃斗　……もう一人の姉ちゃんを助けてほしい。

深冬　え？

晃斗　この前店に来た二人……姉ちゃんの同級生なんだけど、姉ちゃんに対して嫌がらせをしてるみたいで……店に来たときみたいに姉ちゃんが上手くあしらえれば事態が収まるんじゃないかと思うんだ。

深冬　姉ちゃん姉ちゃんってどっちの話してるのかわかりにくいんだけど。

晃斗　俺からすればどっちも同じなんだよ。

深冬　……でももうこのお店には来ないんじゃないかな。私には何もできないと思うよ。

晃斗　解離性同一性障害のことは色々調べたけど、意識的に別人格に交代できる例もたくさんあったんだ。今まではお互いの人格のことを知らなかったみたいだけど、もう一人のことを認識できれば人格同士の対話とか、自分の意思で交代とか、そういうこともたぶんできるんじゃないかって。

深冬　たぶん？

晃斗　……たぶん。

深冬　……。

晃斗　いやそんなの俺だってわかんないよ。調べてもケースバイケースだって書いてあることがほとんどだし、俺は当事者じゃないし……。

深冬　まあねえ。

晃斗　でも、他に方法が思いつかないんだ。……最近の姉ちゃんは学校でも笑ってることが多くなってて、できればそれを絶やしたくない。

深冬　君、昼間もお姉ちゃんのこと見張ってるの？　そういうの不健全だと思うよ。

晃斗　いいだろそこは！

深冬　私のこと心配してくれてたんだよね。ありがと。

晃斗　……俺、姉ちゃんにはずっと笑っててほしいんだ。俺もそうだけど、姉ちゃんはきっと俺よりも辛いことといっぱいあったと思うから。

深冬　……。

晃斗　姉ちゃん。姉ちゃんを助けてくれよ。

深冬　……わかったよ。上手くいくかはわからないけど、やれるだけやってみる。

晃斗　……ありがとう。

深冬　うん。あとはお姉ちゃんに任せなさい！

8

暗い中に深冬が一人でいる。

深冬　……とは言ったものの、どうすればいいのか……。チェンジ！　……こうたーい！……変、身！　……駄目か。（考える）……人格同士の対話、か……。

深冬、当て所もなく歩き回る。

深冬　おーい、私ー。……んー、こっちかな。

泳ぐような動作をしたりしながら歩き回る。

やがて落ち込んで座っている夏実を見つける。

深冬　あ、いた。ほんとにいるとは……。

夏実　……誰？

深冬　えーと、はじめまして？　私は……あなた。アナタ……ワタシ？

夏実　（ドン引き）

深冬　あ待って待って！　どう言ったらいいのかなー。

夏実　っていうか……ここ、どこ？

深冬　たぶん……心の中、とか？　精神世界的な？

夏実　……。

深冬　私、苗木深冬っていいます。あなたは？

夏実　……葉山夏実。

深冬　葉山。……確かお母さんの旧姓だ。

夏実　……ここが私の心の中だとして、あなたはなんなの。

深冬　弟くんは別人格って言ってた。二重人格なんだって。私たち。

夏実　二重人格……。

深冬　……かに玉丼醤油味？

夏実　解離性同一性障害。

深冬　あ、それそれ。

夏実　……人格っていうかそもそも顔が全然違うじゃん。

深冬　たぶんあなた……っていうか私がイメージした姿なんじゃないかな。端から見たら同じ顔だって弟くんが言ってたよ。

夏実　ふーん。

深冬　なんか不思議な感じ。自分が目の前にいて喋ってるなんて。

夏実　とても自分だとは思えないけど。

深冬　だよね。名前も正反対だし。いやむしろ対になっててそれっぽいのかな。

夏実　……。

深冬　……なんで私は生まれたんだろう。

夏実　それは哲学的な問いか何か？

深冬　そうじゃなくて単純に、なんで人格が分かれちゃったのかなって。話聞いてると夏実の方がメインで、私は後から出てきたみたいだから。

夏実　……解離性同一性障害は強いストレスが原因って聞いたことある。

深冬　ストレス。……なんかあったの？

夏実　……。

深冬　あ、言いたくないならいいよ。そうだ。歌でも歌おっか。せっかく私が二人いるからハモりありで。

夏実　……あなたのこと昔の私みたいだって晃斗は言うんだろうね。

深冬　あ、うん。言ってた。

夏実　……昔は、人を笑わせるのが好きだったな。

深冬　……人をっていうか、お父さんだよね。

夏実　……うん。

深冬　お父さん笑い上戸だから何やっても笑うんだもん。

夏実　それで私も自信つけちゃって、将来は芸人になるんだーって。私は名前に夏が付くから、相方は冬がいいなとか妄想してた。

深冬　……そっか。

夏実　お父さんは優しかったから、両親がけんかしてるときはいつもお母さんが悪いんだって思ってた。お父さんをいじめないでって。……でも、本当はお父さんがずっと浮気をしてたんだ。

深冬　そんな……。

夏実　ショックだったよ。大好きだったお父さんが、私たちよりも他人との生活を優先して出ていっちゃって……本当は私のことなんかどうでも良かったんだって。

深冬　……。

夏実　でも私はそれに負けたくなかった。引っ越して、新しい学校で気持ちを新たに頑張ろ

うって気合い入れてさ。

深冬　あ、そうなんだ。

夏実　自己紹介用の小ネタ考えたりして。今考えるとちょっと痛かったかもなー。

深冬　えー、いいじゃんいいじゃん。それで？

夏実　転校初日からいじめに遭ったよ。

深冬　おお……。

夏実　田舎の学校だから噂広まるのも早いんだろうなあ。両親が離婚して転校してきたっていうのはもうみんな知っててさ。不幸があったのに何ヘラヘラしてんだ、触るな不幸が移る、って。……ああ、私は笑ってちゃいけないんだなあ、私は人に触っちゃいけないんだなあって

深冬　そんなことない。

夏実　……あなた、私なんでしょ？　それ自己弁護だよ。恥ずかしい。

深冬　恥ずかしくったっていいよ。笑っちゃいけない人なんていない。人に触っちゃいけないなんてことない。

夏実　薄っぺらいんだよ言葉が。自分でも弁護しきれてないの見え見えじゃん。

深冬　本当は思いっきり笑いたいんだよね。人とふれあって思いを分かち合いたいんだよね。

夏実　やめてよ綺麗事ばっか。あなたなんかに何がわかるの。

深冬　わかるよ。……だって私はあなただもん。

夏実　……。

深冬　だから私が生まれたんだね。本当は笑いたいのに笑えないから。笑ったら駄目だって言い聞かせて、でも笑いたくて。……ごめんね。きっと夏実が経験するはずだった楽しい時間を私が代わりにもらっちゃったんだ。

夏実　……。

深冬　でも、これからは夏実も笑おうよ。今まで笑えなかった分、たくさん、たくさんさ。

夏実　……そんな簡単にはいかないよ。

間。

深冬　……私たち、ハルキゲニアみたいだ。

夏実　え？

深冬　ハルキゲニアは化石が復元されたとき、最初は背中のトゲトゲの方が足だと思われてたんだって。

夏実　うん。知ってる。

深冬　見方によって上下が入れ替わって、トゲで歩く面白生物になったり、トゲで身を守る

臆病な生物になったりする。私たちに似てると思わない？

夏実　あんた自分のこと面白生物だと思ってるの？

深冬　どっちがどっちとは言ってないけど。

夏実　どうだか。

深冬　まあでも実際には真実は一つしかなくて、ハルキゲニア側からしたら勝手にひっくり返すなって話なんだろうけど。

夏実　……それって、私たちも片方は間違った存在で、本当は実在しないってこと？

深冬　（寂しげに笑う）

夏実　……。

深冬　……弟くん言ってたよ。最近の姉ちゃんは笑ってることが多くなったって。一緒に笑える人ができたんでしょ？

夏実　……うん。

深冬　ならもう大丈夫だ。

夏実　……でも、その人からもらった大切なものを取られちゃって……。

深冬　じゃ、取り返そう。

夏実　無理だよ。結局私は過去に縛られて動けないから。

深冬　大丈夫。夏実はもう昔の夏実じゃない。それに、私も手伝うから。

夏実　……。

深冬　一緒にやな奴らを見返してさ。思いっきり笑おうよ。

夏実　……うん。

舞台が明るくなる。

9

学校の教室。夏実と深冬がいる。深冬は夏実の後ろに立っている。

そこへ綾、茉奈がやってくる。

夏実　……あの！

綾　……何？

夏実　私から取ったもの、お願いだから返して。

綾、茉奈、顔を見合わせる。

綾　あれ、私にくれたんじゃないの？

茉奈　ねえ。

夏実　あげてない。返して。

綾　その前にさあ。この間のこと謝ってくれないかな。

茉奈　また覚えてないとか言うわけー？

夏実　えっと……（深冬に）この間のことってなんなの？

深冬　ああ、その二人がお酒飲もうとしてたから駄目だよって言った。

夏実　おさ⁉

綾　何？

夏実　あ、いやなんでもないです。

茉奈　は？

夏実　……ごめん。この間のこと、今思い出した。最近物忘れが激しくて。

深冬　おばあちゃんか。

綾　それで？

夏実　私は……間違ったこと言ったつもりはない。

綾　は？

夏実　でも、別に周りに言いふらしたりはしない。だから、返して。

綾　……それ、脅し？

夏実　そんなつもりじゃ……。

茉奈　そうとしか聞こえないよねえ。

夏実　……。

綾　あーもういいよわかったわかった。ほら、ここにあるからさ。欲しけりゃ持っていきなよ。

茉奈　ほんとに優しいねー綾は。

綾、ハルキゲニアを手に持ち握る。

夏実　……。

夏実、取ろうとするがやはり手を出せない。

そこで深冬が夏実と入れ替わってあっさり取る。

綾　え？

深冬　どうもありがとう。

綾　（慌てて奪い返す）え、ちょ、なんなの？　触れないってのも嘘なわけ？

深冬　昨日治りました。

夏実　風邪じゃないんだから……。

茉奈　それ冗談で言ってんの？

深冬　えっ、面白かった？

茉奈　は？

深冬　実はちょっと狙った部分もあるんだけどとっさの返しだったからイマイチだったかなーって。

茉奈　意味わかんない……。

夏実　あの、手伝ってくれるのはありがたいんだけどあんまり変なこと言わないでね？

綾　……バイトしてることバラされてもいいの？

深冬　え？

綾　他人のふりしてやってたくらいだしやましいことがあるんでしょ。バイトのこと学校とかに知られたらマズいんじゃないの？

深冬　え、マズいかな？　私が勝手に始めちゃったからなー……えーと……。

夏実が深冬と入れ替わる。

夏実　別にやましいことなんかない。事情があればバイトは認められるし、バラされてもいっこうに構わないよ。他人のふりしてたのは学校の人間関係を持ち込みたくなかっただけ。

綾　……。

深冬が夏実と入れ替わってハルキゲニアを取る。

深冬　アノマロウカリーッス！

茉奈　はあ？

夏実　それ黒歴史だから！　やめて！

綾　（奪い返す）なんなのあんた。さっきから言動おかしいし。

深冬　え、そうかな？　普通だと思うけど。

夏実　普通ではないよ。

綾　学校とは違う痛いキャラ作って調子乗ってさ。恥ずかしくないの？　病気？　頭おかしいんじゃないの？

深冬　……それは……。

夏実が深冬と入れ替わる。

夏実　頭おかしいって思われてもいい。人と関わるのが怖くて逃げてた私も、笑いたくて笑わせたくてたまらない私も、全部私だから。実在しない間違った存在なんかじゃない。みんな私自身のいろんな側面なんだ。

深冬　……。

夏実　私は、私を受け入れる。今までよりもっと私を大切にする。私を受け入れてくれた人を大切にする。（ハルキゲニアを指して）それは、あなたにとってはただの交渉の道具に過ぎないかもしれないけど、私にとっては大切なものなんだ。

綾　……。

夏実　私の

深冬　大切なものを

夏・深　返して。

間。

綾　……ダッサ。こんなもののために必死になっちゃって。いらないよこんなの。

綾、ハルキゲニアを床に投げて去る。

茉奈　あ、ちょっと待ってよ。

茉奈、追いかけて出ていく。

夏実、慌ててハルキゲニアを拾いにいく。

夏実　……良かった。

深冬　これで一件落着かな。

夏実　うん。……私たち、これからどうしようか。

深冬　どうって？

夏実　お互いを認識できるようになったわけだけどさ。これまで通り昼と夜で交代制にする？

深冬　あー……そう、なるのかな。私学校の勉強とかついて行ける自信ないしなあ。

夏実　私もバイトとかはちょっと難しいかも……。

深冬　じゃあまた昼寝る不健康な生活かあ。

夏実　別にずっと一緒にいればいいんじゃないの？　主導権は交代するにしても。

深冬　ずっと一緒って窮屈じゃない？

夏実　そんなことないよ。深冬だって自分だもん。一緒にいて嫌とかないよ。

深冬　自分だからこそ嫌になるってこともあると思うけど。

夏実　……。

深冬　それになんか、二人分の人格が常にいるって結構体に負担かけてる感じがするんだよね。さっきからちょっと頭痛い気がする。

夏実　そう言われるとそんな気も……痛っ。

二人、頭を押さえる。

深冬　あ、これ、やばいかも……あっ。

二人、倒れ込む。

暗転。

10

倒れている夏実、深冬。側に智遥がいる。

夏実、深冬、ゆっくり目を開ける。

智遥　あ、起きた。大丈夫？

夏実　智遥……。

智遥　倒れてるんだもん。びっくりしちゃった。何？　貧血？

夏実　んー、そうかも……。

智遥　保健室行く？

夏実　ううん、大丈夫。ごめん。心配かけて。

智遥　全然。人呼んだ方がいいかなーとか考えてたらちょうど起きたから特に何もしてないし。

夏実　そっか。

智遥　……っていうかそれ（ハルキゲニア）、倒れてたときも持ってたの？

夏実　……そうみたい。

智遥　まあ大事にしてもらえてこっちとしても嬉しいけど。トゲトゲが痛くない？

夏実　ちょっとだけ。

智遥　ほら、立てる？

智遥、夏実に手を差し出す。その手を見つめ、止まる夏実。

智遥　……やっぱり保健室行く？

夏実　……あ、ごめん。平気平気。

夏実、智遥の手を握って立ち上がる。

それを見た深冬、夏実と智遥が会話する中でさりげなく立ち去る。

智遥　無理しないで今日は帰ろ。遊びになんていつでも行けるからさ。

夏実　アノマロウ。

智遥　え？

夏実　あ、違う。ありがとう。

智遥　どんな間違え方なの。

夏実　ちょっと頭に残っちゃって、つい。

智遥　……それ、もしかしてアノマロカリスと掛けてるの？

夏実　え、すごい！　よくわかったね。

智遥　すごいというか……夏実が考えたの？

夏実　ほんとちっちゃい頃にだけど。

智遥　ほんとに昔から好きだったんだ。

夏実　そうなんだよね。今考えると変な子どもだったかも。古生物が好きで、お笑いが好きで……。

夏実、はっとして振り返るがそこに深冬はいない。

智遥　……どうしたの？

夏実　……なんでもない。行こ。

夏実、智遥出ていく。

幕。